

# 会計学における歴史分析

## 複式簿記に至るまでの歴史的展開



千葉商科大学商経学部 専任講師

**根岸 亮平**  
NEGISHI Ryohei

### プロフィール

早稲田大学法学部卒業、早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程満期退学、早稲田大学産業経営研究所助手、本学商経学部助教を経て、2019年4月から現職。

## 1 はじめに

近年、簿記や会計の歴史に関するテーマを扱った書籍が耳目を集めている。日本では、田中靖浩著『会計の世界史—イタリア、イギリス、アメリカ 500年の物語』やルートポート著『会計が動かす世界の歴史：なぜ「文字」より先に「簿記」が生まれたのか』、海外では Gleason-white 著『*Double Entry: How the Merchants of Venice Created Modern Finance*』がベストセラーとなった。これらの一般書の中でもしばしば焦点が当てられるのは、「複式簿記はいつ誰がどのように生み出したのか」という論点である。

Luca Pacioli が1494年に著した算術書『*Summa de Arithmetica, Geometrica, Proportioni et Proportionalita* (算術・幾何・比及び比例全書)』(以下、『Summa』という)に象徴されるように、現代会計を支える複式簿記は一般に中世イタリアにその起源があり、特にイタリアの商人によって生み出されたのではないかとされている。実際、複式簿記が企業に適用された最も古い例は13世紀末の Giovanni Farolfi 商会の帳簿であることが確認されている(例えば Lee (1977))。しかし、これらの算術書や帳簿の存在は、複式簿記の登場から数十

年経過していることを示している証拠にすぎず、その起源(誰がいつどのように生み出したのか)を明確に示す文献や証拠は未だ発見されていない。そのため、複式簿記の起源に関する歴史分析は、現代の会計学においても論争の的となる分野である。そこで本稿では、「複式簿記はいつ誰がどのように生み出したのか」という根源的な問いに対して、古代ローマ時代から複式簿記の起源とされる13世紀まで、ヨーロッパ特にイタリアにおける複式簿記に至るまでの歴史的展開を辿ることにより、会計学における歴史分析の一端を明らかにする。

## 2 古代ローマ時代

古代ローマは、イタリア半島を中心とした多部族からなる都市国家から始まり、王政や共和政を経て、領土を拡大して地中海全域を支配していた。De Ste. Croix (1956)では、この古代ローマの会計に関する解説を行っている。De Ste. Croix (1956)によれば、古代ローマの文明は数百年以上にわたり隆盛を極め、さまざまな人種や文化を受け入れたが、この時代における簿記には一貫性があり、重要な進歩はほとんど見られなかったという(p.33)。それまでのエジプト文明と比較して、古代ローマにおける簿記が技術的に最も進歩したといえることは、貨幣を採用したことであるという(De Ste. Croix 1956, pp.21-22)。古代ローマにおける帳簿には、受取、支払、商品、債務者、債権者が記録されていたが、費用を活動ごとに分けるといふ発想や資本的支出と収益的支出の区別はほとんどなく、複式簿記と呼べるような形跡はないという(De Ste. Croix 1956, pp.34-38, and 42)。

一方で、古代ローマ社会では公的な会計責任の概念

が非常に発達しており、簿記がしばしば公共施設の壁に刻まれていた。ただ、その記録は時系列に並んだ単純な受け払いの一覧表であり、これらの記録の主な目的は、役人による執政の会計責任を記録することであったため、そのレイアウトは「不格好で分かりにくい」ものであり、情報は集計されず、支出は照合も要約もされていなかったという (De Ste. Croix 1956, p.26)。

なぜ古代ローマにおいて簿記が発達しなかったのかという問いに対しては、当時の社会における経済的な問題への関心の低さが原因となっていたことが指摘される (Macve 2002, p.455)。当時の経済活動は奴隷に大きく依存し、同胞から収益を得ることに抵抗があったため、経済的な問題への関心が阻害されていたという (Macve 2002, p.454)。

一方で、ローマ帝国が領土を拡大するにつれ、ドナウ川から北アフリカ、スペインからカスピ海に至る共同市場が形成され、大規模な交易の機会が生まれた。このような経済圏の広がりに伴い、簿記もまた広く使用され、発展を遂げていたという見解もある。例えば、Rathbone (1994) は、ローマ時代の帳簿の唯一の目的は不注意や不正に対するチェック機能であるという考え方に異論を唱え、特に3世紀のローマ帝国エジプトのアピヤヌス領においては、単なる権利と義務の追跡という機能を越えた、コスト管理とパフォーマンス測定を含む、中央管理の会計システムを明らかにしている。

また、ローマ帝国が領土を広げたため、地方の役人は税収と支出を詳細に記録することが法律で義務づけられていた。これは、若い政治家志願者が名声を得るための方法として法院での起訴が定着していたため (Finley 1992, pp.150-151)、汚職の容疑をかけられないようにするための予防策でもあったという。法廷での武器として簿記が使われていたという事実は、法的証拠としての重要性を物語っている。

特に、古代ローマ時代において興味深い文献であるケリス農業会計帳簿 (Kellis agricultural account-book) は、木製板の形で残存する包括的な会計文書である。小規模な事業であるにもかかわらず、ケリス農業会計帳では業績の管理よりも在庫や借主の義務の追跡に重点を置いていたという (Kehoe 1999)。Puyou and Quattrone (2018) によれば、ケリス農業会計帳のレ

アウトは、取引のグループ分けと表示に対する定型的アプローチを反映しており、ローマ社会における会計の権威づけにおいて重要な役割を果たしたと主張している。

このように古代ローマ時代における簿記の特徴は、さまざまな状況に対応できる汎用性の高さである。財産、権利および義務の追跡、財産管理人への責任の追及、信頼性の確保、貿易・農業・行政に関連した情報伝達、法廷で強制力を持つ法的記録としての役割など、古代ローマ時代における簿記は多岐にわたり利用されていた。

### 3 ローマ帝国

初代皇帝アウグストゥスの即位から帝政に移行したローマ帝国は、形式的には1453年のビザンツ帝国滅亡まで存続していたが、実質的には395年の東西分裂によって社会や文化が大きく分かれるため、ここでは西ローマ帝国と東ローマ帝国に分けて取り扱うこととする。

#### (1) 西ローマ帝国

東西にローマ帝国が分裂した後、5世紀に西ローマ帝国の権威が失墜してからの400年間は、証拠となる文献がほとんど残されていないため、一般に「暗黒時代」と呼ばれる。この時代は、ゲルマン民族がローマ帝国の領土に侵入し、東部と南部のローマ帝国の大部分がイスラム軍に征服された激動の時代であり、西部ではフランク王国が成立し、フランス、ドイツ、北イタリアを支配下においた。

しかし、証拠となる文献が存在しないからといって、記録が存在しなかったわけではない。この時代における現存する最も重要な書類の1つは、御料地令 (Capitulare de Villis) である。御料地令は、8世紀末にフランク王国の皇帝シャルルマーニュが起案した、領地の管理に関する一連の指示文書であり、帳簿の作成方法が規定されている (全文は Loyn and Percival 1975, pp.68-73を参照)。御料地令では、領地調査書と賦課金・配当金計算書が並列していることから、中央が分散した資源を遠方から管理するという目的があることがわかる。古代ローマ時代における簿記の主な目的の一つは、役人の不正や過失による損失を明らか

にすることであったため (De Ste. Croix 1956: p.38)、御料地令の目的と合致するものである。すなわち、西ローマ帝国の崩壊が起こったとしても、必ずしも古代ローマにおける簿記の慣習が完全に途絶えることはなかった可能性がある。

## (2) 東ローマ帝国

4世紀にはローマ帝国の政治・経済の重心は東部に移り、東ローマ帝国は一時地中海全域を支配した。しかし、その後に再びゲルマン民族の侵攻を受け、東ローマ帝国の支配はギリシャ・小アジアを中心とした東地中海域に限定されるようになり、7世紀からはビザンツ帝国と呼ばれるようになる。1453年にオスマン帝国に「陥落」するまで1000年以上の間、ビザンツ帝国は隣国と貿易を行い、イタリア簿記やイスラム簿記は互いに影響を与え合う環境にあった。

しかしながら、Baker (2013) が指摘するように、会計史の研究においてビザンツ帝国の簿記に関する論文はほとんど掲載されていない。Laiou (2002) には、特に会計や簿記に関する章はないが政府、領主、教会による簿記への言及がなされており、ビザンツ帝国が、政府や人々の言語としてラテン語からギリシャ語を用いるようになったにもかかわらず自分たちをローマ人と呼び続けたように、古代ローマにおける簿記慣習も継承したと考えられている。

## 4 テンプル騎士団

1119年にパレスチナのキリスト教巡礼者を保護するために結成されたテンプル騎士団は、現金出納帳と各取引を一つの勘定科目にのみ記録する単式簿記にもとづく表形式の簿記システムを採用していたことが明らかとなっている (Bisson 1989, pp.287-292)。この表形式簿記の由来は、蠟板 (*tabulae ceragae*) に記録を残していた古代ローマ時代にさかのぼることができる。会計帳簿のうち日計表 (*adversaria*) に貿易におけるすべての取引、債権、債務が記録され、これらの会計データは日計表から表形式の元帳 (*tabulae rationum*) に転記される。この表形式の元帳における最大の特徴は、各勘定科目につき借方および貸方が設けられていたことである。しかし、表形式の元帳に行われる記帳はすべて単式記入であり、複式記入されることはな

かったという (Martinelli 1974, pp.174-184)。

複式記入による場合、すべての記入を単一の通貨で記録する必要があるが、表形式の元帳は単式記入であったため、さまざまな通貨で記入できるという利点があった (Martinelli 1974, pp.265-267)。表形式の元帳は、特定時点における財政状態を把握することのみを目的に作成され、12世紀における小規模で狭い範囲での活動には十分に対応できており、13世紀から14世紀にかけて商業活動が盛んになり、財政状態に加え経営成績を把握することが望まれるようになるまで使用されていたという (Martinelli 1974)。

この表形式簿記は、複式簿記の前身であった可能性が指摘されることがある。しかし、複式簿記の出現は地域により異なることや、複式簿記に関連する動詞の用語法から、表形式簿記が複式簿記に発展した可能性を否定する見解もある。これらの見解を踏まえると、表形式簿記の影響を受けながらも、異なる性質、異なる形式の新しい記入方法として、その後に複式簿記が生み出されたと考えることができる。

## 5 中世イタリア

中世イタリアでは、ヴェネツィア、ジェノヴァ、シエナおよびフィレンツェなど多くの都市国家が発展した。その中でも、複式簿記が最初に出現したのは地域として、しばしば指摘されるのは、シエナやフィレンツェを含むトスカーナ地方である。これは、複式簿記と思われる最古の事例が1211年にフィレンツェの銀行が作成した羊皮紙片にみられるためである。この羊皮紙は各ページが縦に2列になっており、横線で勘定科目が区切られている。各勘定は2つの列のうちいずれか1つの列に記入され、どちらを先に記入するかによって借方または貸方が決定される仕組みとなっている。

この羊皮紙は、Pietro Santini の著書『Frammenti di un libro di banchieri fiorentini scritto in volgare nel 1211』によって初めてイタリア語に翻訳され、その後 Lee (1972) および Martinelli (1974) は、これを英語に翻訳し、使用されている用語や記録について分析をおこなった。Lee (1972) によれば、この羊皮紙の記録は、比較的少額の融資と返済に関するものであり、フィレンツェ、ボローニャ、ピサで活動する本

格的な銀行業を反映しており、「銀行の顧客とその債務者間で負債の相殺を行うという比較的複雑な債務決済の方法」(Lee 1972, p.56) が示されているという。

また、当時のトスカーナにおける話し言葉で記録されており、この羊皮紙における特徴的な用語として以下の動詞が指摘されている (Sangster 2016, p.308)。

1. お金を貸す (*die dare* = should give)、返済を受ける (*die dato* = has given)
2. 預金を受け取る (*die avire* = should receive)、その返済 (*demo dato* = we gave)
3. 預金とローン口座間の振替 (*levammo* = we took)、預金と他人の預金口座間の送金 (*ponemmo* = we put)

これらのうち、*die dare* (should give) と *die avire* (should receive) という動詞が、借方を意味する debit と貸方を意味する credit の語源になったと指摘されており (Martinelli 1974)、Littleton (1926, 1931) は簿記の専門用語はこのような話し言葉から生まれたと結論付けている。以上のことから、複式簿記をいつ誰が生み出したのかという問いに対する1つの有力な答えはこれらの動詞である。これらの動詞は、売買でもなく、賃貸でもなく、授受に関わる動詞である。すなわち、これは銀行業に関する動詞であり、商業に関する動詞ではない。そのため、複式簿記の起源は商人ではなく、トスカーナの首都であるフィレンツェの銀行にあると主張される (Sangster 2016)。

### 【補論】Luca Pacioli と複式簿記の展開

前節の通り、複式簿記が13世紀イタリアの都市国家で生まれたことは、今日広く認められている。実際、1494年に出版された Luca Pacioli の『*Summa*』の *Particularis de Computis et Scripturis* (計算及び記録に関する詳説) という章で、複式簿記は200年以上前からベニスで使用されていたと記されている (Galassi 1996)。この『*Summa*』に象徴されるように、Luca Pacioli は複式簿記と近代会計の父と評されることが多い (Hatfield 1968, p.3)。特に、『*Summa*』の重要性は、その独創性よりも、同時期に登場した印刷技術により複式簿記という新しい知識をヨーロッパ中に普及させた影響力にあるといわれる (Sangster et al. 2011)。

しかし、『*Summa*』の存在にも関わらず、一部の地域の商人は、ほとんど複式簿記を採用せず、単式簿記を採用していたという (Sangster 2018)。特に、北西ヨーロッパにおける簿記の慣習はハンザ同盟の慣例に従う傾向があり、ハンザ同盟の商人たちは、債務者、債権者、在庫を追跡し、代理人に責任を負わせることに限定された単式簿記システムを好み、資本という概念はほとんど意味を持たなかったという (Funnell and Robertson 2013, pp.53-56)。Edwards (1989) は、なぜ複式簿記の普及が遅れたのかという疑問に対して、商人が無知であったことや専門知識の欠如というよりも、企業からの強い要望がなかったことが最も有力な説明であると結論づけている (pp.56-57)。

商人は、債務者、債権者、現金、在庫を追跡し、パートナー間で収益を分配し、ミスや不正を防ぐことができる、または代理人に責任を負わせ、法廷での証拠を提供することができる帳簿を必要としていたのである。したがって、商人たちにとって簿記の主な目的は、彼らの財産や権利を保護することであった。複式簿記の普及しなかったことは、単式簿記のみでこれらの目的を達成することができたこと、さらに言えば商人たちが複式簿記を生み出す動機がなかったことを示唆している。

## 6 おわりに

本稿ではヨーロッパ、特にイタリアに焦点を当て複式簿記に至るまでの歴史的展開を辿ってきた。古代ローマ時代から簿記や会計と呼ぶべきものが存在はしていたが、最終的には中世イタリアにおけるトスカーナのある銀行が複式簿記を生み出したと考えることができる。しかし、はじめに述べたように、その起源を明確に示す文献や証拠は未だ発見されていないため、この見解は複式簿記の起源に関する1つの論説にすぎない。本稿で強調したいことは、明確な文献や証拠がないからこそ、会計学における歴史分析では、限られた情報から当時の社会や文化的な背景について考察を行い、果てには当時用いられていた動詞にまで着目して、複式簿記の起源に迫ろうとしたということである。この他にも様々なアプローチで複式簿記の起源に迫る研究が蓄積されているが、最終的には複式簿記の本質はどこにあるのかという議論に行き着くことになる。

本稿ではこの複式簿記の本質に迫る議論を行うことはできていないが、複式簿記に関する歴史的展開を扱う多くの文献を示すことにより、会計学における歴史分析の一端を示そうとしてきた。

また、簿記の歴史は膨大であり、各時代における貿易関係の複雑さ、ローマ帝国の大部分がイスラムに征服されたことなどから、本来であればヨーロッパ以外の地域における簿記の歴史的展開についても検討する必要がある。東地中海の間では大規模な貿易が行われており、イタリアの商人が、すでに複式簿記の原型が

使われていた他の文化と接触し、簿記を含めた商習慣が相互に模倣されていた可能性は大いにある。実際、Napier (2009) ではユダヤ人商人の交易ネットワークも簿記伝播の場として機能していた可能性が指摘され、Zaid (2000, 2001) や Nobes (2001) では中世イスラムからの影響の可能性について議論している。この他にも中国、インド、アフリカなど、簿記の歴史において重要な地域について十分に取り上げることはできていない。その他の文明・地域における簿記の歴史分析については、稿を改めて検討したい。

#### 参考文献

- Baker, C. R. (2013). Administrative and accounting practices in the Byzantine Empire. *Accounting history*, 18(2), pp.211-227.
- Barber, M. (2012). *The new knighthood: A history of the order of the temple*. Cambridge University Press.
- Bisson, T. N. (1989). *Medieval France and her Pyrenean neighbours: Studies in early institutional history* (Vol. 70). A&C Black.
- De Ste. Croix (1956). Greek and Roman accounting, in A.C. Littleton and B.S. Yamey (eds.) *Studies in the History Accounting*, pp.114-174. Sweet & Maxwell.
- Edwards, J.R. 1989. *A History of Financial Accounting*. Routledge.
- Finley, M.I. (1992). *The Ancient Economy*. Penguin.
- Funnell, W., & Robertson, J. (2013). *Accounting by the first public company: the pursuit of supremacy*. Routledge.
- Galassi, G. (1996). Pacioli, Luca, in M. Chatfield and R. Vangermeersch (eds.) *The History of Accounting: An International Encyclopedia*, pp.445-447. Garland.
- Hatfield, H.R. (1968). An historical defence of bookkeeping, in M. Chatfield (ed.) *Contemporary Studies in the Evolution of Accounting Thought*, pp.1-11. Dickinson.
- Kehoe, D. P. (1999). Tenancy and oasis agriculture on an Egyptian estate of the 4th c. AD. *Journal of Roman Archaeology*, 12, pp.745-751.
- Laiou, A.E. (2002). Political history: an outline, in A.E. Laiou (ed.) *The Economic History of Byzantium*, Vol. 1, pp.9-28. Dumbarton Oaks.
- Lee, G. (1972). The oldest European account book: a Florentine bank ledger of 1211. *Nottingham Medieval Studies*, 16, pp.28-60.
- Lee, G. A. (1977). The coming of age of double entry: the Giovanni Farolfi ledger of 1299-1300. *The Accounting Historians Journal*, pp.79-95.
- Littleton, A. C. (1926). Evolution of the ledger account. *The Accounting Review*, 1(4), pp.17-23.
- Littleton, A. C. (1931). Early transaction analysis. *The Accounting Review*, 6(3), pp.180-183.
- Loyn, H. R., and Percival, J. (1975). *The Reign of Charlemagne: Documents on Carolingian Government and Administration* (Vol. 2). Edward Arnold.
- Macve, R. (2002). Insights to be gained from the study of ancient accounting history: some reflections on the new edition of Finley's *The Ancient Economy*. *European Accounting Review*, 11(2), pp.453-472.
- Martinelli, A. (1974). *The Origination and Evolution of Double Entry Bookkeeping to 1440*. Ph.D. Dissertation, North Texas State University.
- Napier, C. (2009). Defining Islamic accounting: current issues, past roots. *Accounting History*, 14(1-2), pp.121-144.
- Nobes, C. W. (2001). Were Islamic records precursors to accounting books based on the Italian method? A comment. *Accounting Historians Journal*, 28(2), pp.207-214.
- Puyou, F. R., & Quattrone, P. (2018). The visual and material dimensions of legitimacy: Accounting and the search for socie-ties. *Organization Studies*, 39(5-6), pp.721-746.
- Rathbone, D. (1994). Accounting on a large estate in Roman Egypt, in R.H. Parker and B.S. Yamey (eds.) *Accounting History: Some British Contributions*, pp.13-56. Clarendon Press.
- Sangster, A., Stoner, G. N., & McCarthy, P. (2011). In defense of Pacioli. *Accounting Historians Journal*, 38(2), pp.105-124.
- Sangster, A. (2016). The genesis of double entry bookkeeping. *The Accounting Review*, 91(1), pp.299-315.
- Sangster, A. (2018). Pacioli's lens: God, humanism, Euclid, and the rhetoric of double entry. *The Accounting Review*, 93(2), pp.299-314.
- Zaid, O. A. (2000). Were Islamic records precursors to accounting books based on the Italian method?. *Accounting Historians Journal*, 27(1), pp.73-90.
- Zaid, O. A. (2001). Were Islamic records precursors to accounting books based on the Italian method? A response. *Accounting Historians Journal*, 28(2), p.9.